



酒田に期待される外国人観光客の来訪

東北公益文科大学 准教授 松山 薫

最近、酒田市内の交通・観光拠点に足を運ばれた方は、ある変化にお気づきかもしれない。従来、案内板やアナウンスの言語はほとんど日本語（まれに英語も）のみだったが、3月から場所により英語、中国語、韓国語などが加わったのである。これは、観光庁の「外国人旅行者の移動容易化のための言語バリアフリー化調査事業」における対象エリアの一つとして酒田が選ばれたためである。平成23年度には全国26カ所が同事業の対象となったが、昨年3月11日の東日本大震災の影響による訪日外国人観光客の大幅な落ち込みを受けて、東北地方は酒田を含めて4カ所で実施された（地方別にみると最多）。

酒田では、庄内空港、庄交バスターミナル、JR酒田駅、飛鳥航路定期船乗り場などの交通拠点、空港から酒田市街地へ行くリムジンバスなどの二次交通、山居倉庫などの観光拠点において、看板、案内板、アナウンス、街歩き地図や施設パンフレットなどを多言語化した。外国人観光客が感じる言葉の障壁を少しでも減らし、独力で酒田を自由に観光できる環境に近づけることがねらいである。

一昨年の10月、東京の羽田空港新国際ターミナルが開業した際に、羽田から都心に向かうリムジンバスのアナウンス言語が一举に4カ国語に増えたときは、「おおっ」と思ったものだが、今やそれと遜色ないアナウンスが、乗り慣れた路線バス仕様の庄内空港発酒田行きリムジンバスのスピーカーから流れてくる。落ち穂をついばむ田んぼの白鳥を車窓に眺めながらそれを聞いていると、晴れがましいとかほほえましいとか、なんとも不思議な気分になる。

実質3カ月で整備されたこの事業について、留学生や日本語を母国語としない県内在住者らがモニター評価を行ったが、その結果はおおむね好評であった。私は関係委員としてモニター調査に同行させていただいたが、定期国際線のない庄内空港もさながら国際空港のようになった。他の部分の整備も、よくこれだけ短期間に、と驚いたものである。

現在、実際に酒田を訪れる外国人観光客は、チャーター航空便による団体客が大半で、今回の整備が即効性をもつかという意味では懐疑的な見方もあるだろう。しかし、そもそも酒田は国際貨物航路のある港町である。こうした異国情緒(?)がもう少しあってもいいのではないだろうか。また、酒田にはドラマ「おしん」や映画「おくりびと」で観光客が増えた経験がある。フィルム・ツーリズム、コンテンツ・ツーリズムなどとよばれるこうした旅行形態は、いつ何時大量の外国人観光客を酒田に送り込んでくるかわからない。

もう一つ興味深かったのは、3月のモニター調査で各施設を回ったときに、多言語パンフレットがあちこちで品薄になっていたことである。これはどうも、必要に迫られた外国人がその言語のパンフレットを持って行くというよりは、地元の人が物珍しさから(?)並べた先から持って行ってしまいうらしい。これは本来の目的と異なるとはいえ、私はそれなりの効用があると思っている。観光客を歓迎するには、地域住民全体のホスピタリティの向上が必要である。地元の人がこれらの外国語パンフレットを見て、自分たちの住む地域の観光資源を見直し、外国からわざわざ来るに値するものがこんなにあるのだ、という誇りを新たにするという副次的効果は大きいのではないか。

今回のハード面の整備は、草の根レベルで外国人観光客へ相対する意識を知らず知らずのうちに醸成する。そうした市民のあたたかいまなざしも、酒田が外国人観光客を呼び込める観光地として成長するにあたって不可欠なのではないだろうか。

松山 薫 (まつやま・かおる)

東北公益文科大学公益学部准教授。東京都出身。お茶の水女子大学文教育学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士(学術)。専門は地理学。2001年より同大学に勤務。著書に『人口減少と地域—地理学的アプローチ』(共著、京都大学学術出版会)、『身近な地域の環境学』(共著、古今書院)などがある。2006年より大阪観光大学観光学研究所客員研究員を兼務。